

初夏の夕暮れに白い花を咲かせる、夢い命の夕顔

## 源氏物語 夕顔 第四帖

六条わたりの御忍び歩きのところ、内裏よりまかでたまふ中宿りに、大貳の乳母のいたくわづらひて尼になりにはけるとぶらはむとて、五条なる家たづねておはしたり ～

夕顔

心あてにそれかとぞ見る白露の光添へたる夕顔の花

光源氏

寄りてこそそれかとも見めたそかれにほのぼの見つる花の夕顔



写真右上 高辻通り堺町通り南へ30m程の所 夕顔の墳。  
ここから「なにがしの院」まで徒歩で15分くらい。堺町通りを南へ現在の五条通りに入る。五条通りを渡り高瀬川の横の「源融 河原院跡」に着く

そのわたり近き「なにがしの院」におはしまし着きて、預り召し出づるほど、荒れたる門の忍ぶ草茂りて見上げられたる、たとしえなく小暗し。霧も深く露けくに、簾をさへ上げたまへれば、御袖もいたく濡れにけり。

写真右下 「なにがしの院」 源融（822年～895年）河原院跡  
深夜、源氏は六条御息所の恐ろしい夢を見た。ハット目覚めると、嫉妬に狂った六条御息所の精霊が夕顔に取り憑いていた。

この御かたはらの人をかきおこさむと見たまふ。

物に襲はるる心地して、驚きたまへれば、灯も消えにけり。うたて思はるれば、太刀を引き抜きてうち置きたまひて、右近を起こしたまふ。

この女君いみじくわななきまどひて、いかさまにせむと思へり ～

6期生 歴史文学部 岡野 明  
(写真&徒歩調査10月22日)

